イントラムロス（マニラ）の形成と街路体系に関する考察 CONSIDERATIONS ON FORMATION AND STREET SYSTEM OF INTRAMUROS (MANILA)

塩田 哲也*, J.R. ヒメネス ベルデホ**, 布野 修司***
Tetsuya SHIODA, Juan Ramón JIMÉNEZ VERDEJO and Shuji FUNO

Authors have been conducting the field research on the former Spanish colonial cities under the title 'Origin, Transformation, Alteration and Conservation of Urban Space of Colonial Cities since 1999. In the Spanish colonial period, cities were planted and established in Philippines. This paper focuses on Intramuros, the historic walled area of Manila city which is one of the three city established by Spain in Asia. As cartographic database, images and maps from AGI (Archivo de Indias de Sevilla), other archives and libraries in the Philippines are used for analysis.

This paper clarifies the formation and transformation process of Intramuros based on the analysis of historical maps and street pattern and block size, also the present formation of urban core of the city based on the field survey on the distribution of facilities and building types.

Keywords : *Intramuros, Manila, Spanish colonial, Grid, Street system, Urban tissues*

イントラムロス, マニラ, スペイン植民都市, グリッド, 街路体系, 都市組織

1. はじめに

本研究は、「植民都市空間の起源・変容・転成・保全に関する調査研究」と題する植民都市研究の一環として、スペイン植民都市を対象とし、その拡大深化を図ることを大きな目的としている。本研究の遂行過程で、セビーリャ Sevilla のインディアス古文書館 (Archivo General de Indias (AGI)) に収蔵された植民都市関連地図資料全 7,152 枚をマイクロフィルムの形で、またマドリード Madrid にある陸軍博物館資料 Servicio Histórico Militar (SHM) と Servicio Geográfico del Ejército (SGE) の地図資料全 1514 枚 (全 10 巻) を手に入れている^{注1)}。

本稿では、フィリピンの首都マニラ Manila の都市核であるイントラムロス Intramuros に焦点を当てる。古地図をもとにマニラの都市形成についてまとめた上で、臨地調査に基づいて、現状の施設分布等を明らかにし、街路体系、街区構成、そして敷地割りを中心にその特質を明らかにする。スペイン植民都市として建設されたセブ^{注2)}やヴィガン^{注3)}なども含めて、他のスペイン植民都市との比較が大きな視点となる。

マニラは、セブ、パナイに続きミゲル・ロペス・デ・レガスピ Miguel López de Legazpi によって、建設された 3 番目の都市である。イントラムロス (イントラ=内側, ムロス=壁) はその名の通り、城壁で囲まれた都市である。

主要参考文献は末尾に示す通りであるが、マニラに関する既往研究は決して多くは無い。フィリピンにおけるスペイン植民都市の概要とイントラムロスの都市形成を一覧にしたリード Reed, Robert

R. (1978) の論文がある。その他にも Galván Guijo, Javier (2004) や Ortiz Armengol, Pedro (1958) があり、都市形成に関する資料はいくつかある。イントラムロス内に建設された建物についてまとめたテレス Victor Z. Torres, José (2005) もある。また、1595 年から 1603 年までフィリピン副総督に就任したモルガ de Morga, Antonio が書いた『フィリピン諸島誌 Sucesos de las Islas Filipinas』(1609) がある。

本研究の基となる現地調査は、2009 年 9 月 11 日～2009 年 9 月 24 日 (布野修司, J.R. ヒメネス・ベルデホ, 飯田敏史, 若松堅太郎), 2010 年 7 月 31 日～2010 年 8 月 13 日 (J.R. ヒメネス・ベルデホ, 塩田哲也, 山口健太, 山田聖), 2011 年 11 月 2 日～2011 年 11 月 9 日 (J.R. ヒメネス・ベルデホ, 梅谷敬三, 平沢陽) の三次にわたって行なった。

図1 マニラとフィリピン諸島

* 東洋建設(株) 修士(環境科学)

** 滋賀県立大学環境科学研究科 准教授・博士(芸術工学)

*** 滋賀県立大学環境科学研究科 教授・工博

Tohyoh Construction Co., Ltd., Master (Environmental Science)
Assoc. Prof., Graduate School of Environmental Planning, University of Shiga Prefecture, Ph. D.
Prof., Graduate School of Environmental Planning, University of Shiga Prefecture, Dr. Eng.

2. マニラの地図資料

フィリピン植民都市関連地図資料に関しては、セビージャのインディアス古文書館 AGI に 299 枚（内、マニラ 105 枚）ある。マドリード Madrid の陸軍博物館資料 SGE/SHM に 140 枚（内、マニラ 43 枚）ある。その他に、作成者は不明であるが、メキシコのプエブラ Puebla にあるホセ・ルイス・ペロー美術館 Museo de Arte José Luis Bello に所蔵される、1640 年から 1650 年にかけてのマニラを描いたとされる絵図、ヴァヤドリッド Valladolid のシアマンカス古文書館 Archivo General de Simancas (AGS) に所蔵される地図、アントニオ・フェルナンデス・ロハス Antonio Fernández Rojas によって 1715 年から 1720 年にかけて描かれたとされる絵図、ヴァルデス・タモン Valdés Tamón の時代（1729-1739）の都市図（1738）、アメリカ統治期に建築家ダニエル・ハドソン・バーナム Daniel Hudson Burnham^{注 4)}の都市計画図がある。

これらの地図は、「スペイン植民都市図に見る都市モデル類型に関する考察」^{注 5)}によれば、A 一般地図、B 軍事用地図、C 領域計画図、D 都市一般図、E 都市計画図、F 建築計画図、G 都市建築要素の詳細図、H その他の 8 種に分類される。マニラのイントラムロスについては要塞に関する図面資料は多く、F 建築計画図を、F-1 一般建築計画図（教会、各種施設、住居など）と F-2 要塞図（要塞、市壁、門、塔など）に分けると、マニラに関する地図類は、D 都市一般図（42 枚）、E 都市計画図（6 枚）、F-1 一般建築計画図（39 枚）、F-2 要塞図（66 枚）となる。D 都市一般図と E 都市計画図の合計 48 枚を、「都市図Ⅰ」（イントラムロスのみ街区構成が描かれた都市図）、「都市図Ⅱ」（イントラムロスも周囲の町も街区が描かれている都市図）、「都市図Ⅲ」（イントラムロスが描かれず、もしくは一部のみで、周辺の町の街区が描かれた都市図）の 3 つの項目に分けて、表 1 に示す^{注 6)}。

3. イントラムロスの建設過程

地図資料と諸文献等をもとに、イントラムロス内に建設された建物の年代に着目し、イントラムロスの建設過程とその変容をまとめると以下ようになる。主要な段階の地図を図 2 に、また、以下の A ～I に対応したイントラムロスの構成を GIS データをベースマップとして図 3 に示す。

A マニラのイントラムロスは、バイ湖 Laguna de Bay からマニラ湾 Manila Bay に注いでいるパシグ川 Rio de Pasig の氾濫により土砂が堆積して形成された三角州に位置する。10 世紀ごろには居住が認められ、バラングイ Barangay（タガログ語は Baranggay、集落、共同体）が形成され、農耕や狩り漁業を営

み、中国や東南アジアと交易を行っていたとされる。13 世紀から 16 世紀にかけて、バラングイは、ラカン Lakan あるいはラージャ Rajahs、ダトゥと呼ばれる王や首長によって統一され、パシグ川河口の南岸にソリマンが治めるマイニラ Maynila^{注 7)}、北側にはラカン・ドゥーラ Lakan Dula が治めるトンド Tondo と呼ばれる集団があり、港市として栄えていた（Reed, Robert R.(1978)）。

B 1571 年、中央広場 Plaza Mayor となる場所に木の幹を埋め、上陸の記念式典が行われた。この広場の南に教会（マニラ大聖堂）、東に市庁舎 Casas de Cavildo、西に総督邸 Real Palacio を割り当てた。当初、総督邸はソリマン期の砦の中に建設されたが、1645 年に起きた地震によりこの地に移された（de Morga, Antonio(1609)）。

C 初期のマニラは木造であった。1574 年中国人海賊林鳳によるマニラへの攻撃を受け、総督ラベサレス Guido de Labezares（1572 -1575）は、木の柵でマニラを囲む計画をする。次の総督サンデ Francisco de Sande（1575-1580）の時代に完成し、カバイエロス Caballeros と呼ばれる木造の見張り台も建設された。ロンキヨ Gonzalo Ronquillo de Peñalosa 総督期（1580-1583）に、中国人居住地パリアン^{注 8)}が創設される（1582）。1583 年ロンキリョの死後、サン・アウグスティン教会 San Agustín Church で葬式中に出火し、マニラは焼け落ちた（de Morga, Antonio(1609)）。

D 1584 年に総督に即位したベラ Santiago de Vera(1584-1590) は、マニラの大火災を受け、石造化を命じた。最古の石造建築物は、イエズス会士アントニオ・セデーニョによるサン・イグナシオ教会 San Ygnacio Church であった。沿岸部にヌエストラ・セニョーラ・デ・ギア要塞 Fort Nuestra Señora de Guía（1586）も建設している。またパシグ川河口にあった木造の砦は石造化され、サンティアゴ要塞 Fort Santiago（1589 -1592）と名付けられた。次総督であるゴメス・ペレス・ダスマリニャス Gómez Pérez Dasmariñas（1590 -1593）と息子のルイス・ペレス・ダスマリニャス Luis Pérez Dasmariñas（1593-1596）期に、木の柵も石造の城壁へと再建される（レオナルド・トリアノの計画）。ヌエストラ・セニョーラ・デ・ギア要塞もサン・ディエゴ要塞に再建される（de Morga, Antonio(1609)）。

表 1 マニラの都市図一覧

	地図コード	地図年代	地図の分類		地図コード	地図年代	地図の分類
1	MP-FILIPINAS,10	1671	都市一般図/都市図Ⅰ	23	AGI,MP-FILIPINAS,131	1796-06-28	都市一般図/都市図Ⅱ
2	AGS	1685-1687	都市一般図/都市図Ⅱ	24	AGI,MP-FILIPINAS,189	1796-12-31	都市一般図/都市図Ⅱ
3	Antonio Fernández Rojaz	1715-1720	都市一般図/都市図Ⅱ	25	SH 6499 (Hoja 1)	1799	都市一般図/都市図Ⅱ
4	Valdés Tamón	1738	都市一般図/都市図Ⅱ	26	SGE Q-1-3-87	1802	都市一般図/都市図Ⅱ
5	AGI,MP-FILIPINAS,31	1746-05-14	都市一般図/都市図Ⅲ	27	SH 7414	1806	都市一般図/都市図Ⅲ
6	AGI,MP-FILIPINAS,42	1763-07-29	都市一般図/都市図Ⅱ	28	AGI,MP-FILIPINAS,191	1814-01-03	都市一般図/都市図Ⅲ
7	AGI,MP-FILIPINAS,43	1764-01-04	都市一般図/都市図Ⅱ	29	AGI,MP-FILIPINAS,133	1814-01-04	都市一般図/都市図Ⅱ
8	AGI,MP-FILIPINAS,160	1764-07-12	都市計画図/都市図Ⅱ	30	SH 6521	1814	都市一般図/都市図Ⅱ
9	SH 6676 (Hoja 16)	1766	都市一般図/都市図Ⅲ	31	SH 6658	1831	都市一般図/都市図Ⅱ
10	SH 6520 (Hoja 3)	1767	都市一般図/都市図Ⅱ	32	SH 13878 (Hoja 1)	1831	都市一般図/都市図Ⅲ
11	AGI,MP-FILIPINAS,51	1767-09-30	都市一般図/都市図Ⅱ	33	SH 13975 (Hoja 2)	1831	都市一般図/都市図Ⅲ
12	AGI,MP-FILIPINAS,63	1770	都市一般図/都市図Ⅱ	34	SH 13993(Hoja 2)	1831	都市一般図/都市図Ⅲ
13	AGI,MP-FILIPINAS,232	1771-12-15	都市計画図/都市図Ⅱ	35	SH 13966 (Hoja 3)	1834	都市一般図/都市図Ⅱ
14	AGI,MP-FILIPINAS,72	1772-07-01	都市計画図/都市図Ⅱ	36	SH 13955	1838	都市一般図/都市図Ⅲ
15	SGE Q-1-3-65	1777	都市一般図/都市図Ⅱ	37	SH 6685	1842	都市一般図/都市図Ⅱ
16	AGI,MP-FILIPINAS,93	1779	都市一般図/都市図Ⅱ	38	SH 6502	1843	都市計画図/都市図Ⅲ
17	AGI,MP-FILIPINAS,229	1783-06-26	都市一般図/都市図Ⅰ、宅地	39	SH 6659	1859	都市一般図/都市図Ⅲ
18	SH 6583 (Hoja 1)	1784	都市一般図/都市図Ⅱ	40	SGE Q-1-3-94	1898	都市一般図/都市図Ⅰ
19	AGI,MP-FILIPINAS,123	1785-05-31	都市一般図/都市図Ⅱ	41	Daniel Hudson Burnham	1904	都市計画図/都市図Ⅱ
20	SH 6676 (Hoja 6)	1785	都市一般図/都市図Ⅱ	42	SGE Q-1-3-66	1780?	都市一般図/都市図Ⅱ
21	AGI,MP-FILIPINAS,185	1793-05-12	都市計画図/都市図Ⅱ	43	SH7316	18-?	都市一般図/都市図Ⅱ
22	AGI,MP-FILIPINAS,188	1795-12-23	都市一般図/都市図Ⅱ				
AGI:El Archivo General De Indias, AGS:Archivo General De Simancas, SH:Servicio Histórico Militar, SGE:Servicio Geográfico del Ejército

図2 マニラの歴史地図

1:1671, AGI,MP-Filipinas.10. 2: Antonio Fernández Rojas, 1715-1720. 3:1757, AGI,MP-Filipinas.40. 4: 1756, AGI,MP-Filipinas.38 . 5:1764, AGI,MP-Filipinas.160. 6:1783, AGI,MP-Filipinas,225. 7:1783, AGI,MP-Filipinas,229. 8:1842, SH 6685. 9: Manila Master Plan, Daniel Hudson Burnham, 1904 from *Plan of Chicago*, the Commercial Club, 1909.

E マニラの城塞化が完成すると、1603 年からは、城壁の外側に堀を築く計画が行われる。同時に、城壁にサン・アンドレス要塞 Baluarte de San Andrés (1603)、パリアン要塞 Revellín del Parian (1603)、サンタ・イザベル要塞 Baluarte de Santa Isabel (1609-1632) が建設され、軍事面での強化が図られた。1611 年には、現在アジアで最も古い大学であるサント・トマス大学が建設される。パッシング川には、1623 年にエスパーニャ橋 Puente de España が架けられ、同時に、橋門プリンシパル門 Puente Principal もつくられた。1671 年の都市図でイントラムロスの完成が確認できる。この時までには、54 街区、城壁には 5 つの門が設置された (図 2-1) (Galván Guijo, Javier(2004))。

F 1718 年にはサンチャゴ要塞に堀が造られ、独立する (図 2-2)。1757 年には、パッシング川の護岸工事が開始され、北部トンド地区は海岸線の埋め立てが始まる (図 2-3)。また八角形のパリアンの市場である Real Alcaicería de San Fernando は、1754 年に建設された (図 2-4)。1756 年から始まる英仏七年戦争に加戦したためイギリスは、スペイン植民地にも攻撃し、マニラも同様に被害を受け、占領される。1763 年のパリ条約で七年戦争が終結し、スペインに返還

されると、さらなる軍事強化のため都市改造計画が行われる (図 2-5)。イントラムロスの街区構成は、1671 年の都市図以降ほとんど変化することはないが、1784 年には、アルカイセリア・デ・サン・ホセ Alcaicería de San José と呼ばれる中国人市場が建設されることで街区が変化する (図 2-6)。また 1770 年以降の都市図から、広場が拡大している。唯一宅地が描かれている都市図は 1783 年に描かれた (図 2-7) (Galván Guijo, Javier(2004))。

G パリアンは、1860 年に廃止され、北部ビノンド等に移される。サン・ガブリエル地域は公園として整備された。1818 年には、パコ・パーク (墓) が建設され、パッシング川には、第 2 のケソン Quezon 橋も架けられた。フランス革命 (1789) 以降、スペイン植民都市で独立運動が相次ぐ。米西戦争の結果、スペインの統治は、セブの植民地支配から 333 年経った 1898 年で幕を閉じる (図 2-8)。

H アメリカ時代になると、アメリカ軍による評議会は、1904 年までにパッシング川沿いの城壁を取り壊し、完全に取り壊すことを決めていた。しかし、マニラの都市計画を行った建築家バーナムによってイントラムロスは守られる。バーナムは、城壁など、中世の防御システムの遺産として価値を評価し、イントラムロスの都市構造

図3 イントラムロスの都市形成

A:1571, B:1571-1573, C:1574-1583, D:1584-1596, E:1597-1671, F:1672-1784, G:1785-1898, H:1904 (計画), I:現在

表2 イントラムロスの建設年表

位置	要塞・門・建物名	建設年	建設者	用途
A	Plaza Roma(Plaza Mayor)	1571	Miguel López de Legazpi	広場
a	Fuerte Santiago	1571	Miguel López de Legazpi	要塞
	Fuerte Santiago(石造)	1589-1592		
	Baluarte de Santa Barbara	1593		稜堡
	Baluarte de San Miguel			稜堡
	Baharte de San Francisco			稜堡
	Rizal Shrine	1593		陸軍施設
a/C	Real del Palacio	1571	Miguel López de Legazpi	総督邸
C		1645	Manuel Estacio de Venegas	
		1902		広場
		1976		政府施設
B	Manila Cathedral	1571		教会
		1581	Fray Francisco Domingo de Salazar	
E	San Agustin Church	1571		教会
F	Hospital Militar	1575		病院
	Army-Navy Club	1926		軍事施設
		1930s後半		ホテル
G	San Francisco Church	1578		教会
H	the Hospital de San Juan de Dios	1578	Franciscan	病院
c	Fort Nuestra Seden de Guia	1586	Antonio Sedeno	稜堡
	Baluarte de San Diego	1593		
I	Church of Santa Ana	1587		教会
	San Ignacio Church	1632	Gianantonio Campioni	
J	Hospital de San Gabriel	1587	Dominicans	病院
K	Santo Domingo Church	1588	Dominicans	教会
	Philippine Amerian Insurance	1946		保険会社
	Far East Bank	19-		銀行
L	Almacenes Reales(Royal Warehouse)	1591		倉庫
M	Colegio de Santa Potenciana	1591	Gomez Perez Dasmariñas	学校
d	Bahuarte de San Francisco de Dilao	1592		稜堡
e	Baluarte de San Gabriel	1593	Dominicans	稜堡・病院
i	Puerta del Parian	1593		門
ii	Puerta Real	1593		門
N	Colegio Maximo de San Ignacio	1596	Jesuit	学校
O	Colegio San Jose	1601	Jesuit	学校
iii	Puerta de Santa Lucia	1603		門
f	Bahuarte de San Andres	1603		稜堡
g	Revellin del Prian	1603		稜堡
D	Casas Consistoriales(Ayuntamiento)	1607		市庁舎
P	Recoletos Church	1608	Augustinian Recollect	教会
h	Bahuarte de Santa Isabel	1609-1632		稜堡
Q	University of Santo Tomas	1611	Archbishop Miguel de Benavides	学校

位置	要塞・門・建物名	建設年	建設者	用途
R	Colegio de San Juan de Letran	1620	Juan Alondo Jeronimo Guerrero	学校
S	Monasterio de Santa Clara	1621	Mother Jeronima de Asuncion	教会
T	Puente de Espana	1623		橋
	Puente Principal			橋門
U	Plaza Santo Tomas	1627	Dominicans	広場
	Colegio de Santa Rosa	1750	Mother Paula de la Santissima Trinidad	学校
V	Colegio de Santa Isabel	1632	Hermanidad de la Santa Misericordis	学校
		1882	Franciscan friar Ft. Felix de Huerta	銀行
		1932		学校
W	Beaterio-Colegio de Santa Catalina	1633	Venerable Mother Francisca del Espiritu Santo	学校
X	Capilla Real(Royal Chapel)	1636	Sebastian Hurtado de Coruera	王室教会
vi	Bahuartillo de San Francisco Javier	-1645		稜堡
Y	Palacio Arzobispal	1653	Archbishop Miguel de Pardo	大司教邸
iv	Puerta de Postigo	1662		門
j	Bahuarte de Santo Domingo	1671		稜堡
Z	Beaterio de la Compania de Jesus	1684	Mother Ignacia del Espiritu Santo	修道女施設
v	Puerta de Almacenes	1690		門
AA	Seminario Conciliar de San Clemente	1705	Don Manuel Suarez de Oliviera	学校
	Real Colegio de San Felipe	1712	King Philip V	学校
a	Plaza Willard	1925	Charles G. Willard	広場
a	Casa del Castellano	1718		住宅
AB	Real Alcaiceria de San Fernando	1754	Pedro Manuel de Arandia Santisteban	市場
k	Revellin de Bagumbayan	1764		稜堡
AC	Parian de San Jose	1784	Jose Basco	市場
	Manila High School	1864		学校
vi	Puerta de Santo Domingo	18th		門
AD	Ateneo de Manila	1816	Don Pedro de Vivanco	学校
	Augustinian Provincial House	1896	Juan Hervas	住宅
	Adamson University	1939	Augustinian	住宅・学校
	ECJ building	1980s		オフィス
AE	Aduana	1823-1829	Tomas Cortes	税関
	Intendencia General de Hacienda	1876		税関、宝庫
AF	Banco Espanol-Filipino de Isabel II	1851	Junta de Autoridades	銀行
vii	Puerta Isabe II	1861	Francisco Sabatini	門
AG	Escuela Normal de Maestros	1863	Royal Decree	学校
	San Carlos Seminary and Cathedral	1896	Archbishop Bernardo Nozaleda	教会
	U.S. Army provost marshal's office	1903	Civil Commission	軍事施設
	Saint Paul's Hospital	1905		病院
49	Loures Church	1886-1891		住宅
		1892	Manuel Flores	教会
a	Jose Rizal	1896		教会
AE前	Plaza Espana	1897		広場

を保存した。バーナムによる都市計画は、実際はあまり計画通りに建設されなかったが、トンド、ピノンド地区など、パシグ川より北部の地域でその街区形状が見られる（図 2-9）。1934 年にアメリカ合衆国議会のタイディング・マクダフィー法設置により、フィリピンは 10 年後の完全独立を約束される。しかしその前の 1941 年 12 月 8 日には太平洋戦争が勃発、日本軍はフィリピン侵略を開始する。1942 年 1 月 2 日には首都マニラに進行し、翌日には軍政を開始した。これ以降 1945 年 8 月の終戦までフィリピンは 3 年 8 カ月に及ぶ日本の占領支配を受け、この間にマニラを中心にアメリカからの攻撃を受け続け、壊滅的な被害を受ける。

I 1951 年にエルピディオ・キリノ Elpidio Quirino 大統領によってイントラムロスを修復することが注目され、1966 年アレハンドロ・ロセス Alejandro Roces を議長とするイントラムロス復興委員会 Intramuros Restoration Committee(IRC)が設立、一部の城壁と 6 つの門、サンチャゴ要塞が修復された。1979 年には、フェルディナンド・マルコス Ferdinand Marcos 大統領は、イントラムロス管理局 (IA)を設立、法律を制定し管理した。イントラムロス管理局は、イントラムロスの監視と維持、修復、管理を主な責務としている。現在城壁はパシグ川部分を除き再建された。イントラムロス管理局は、イントラムロスのみに範囲をとどめず、その他のヴィガンやイロコス、ネグロスなどルソン島全域を管轄するようになっている。

復興もこれまでの街区構成を採用し、現在に至るまで街区構成はほとんど変化していないことが特徴である。

4. イントラムロスの空間構成

4-1 建築物の分布

GIS データによると、現在イントラムロス内には、街区が 54、建築物は 746 棟ある。臨地調査によって確認できなかった建物が 219 棟あるが、そのほとんど（135 棟）はひとつの街区（図 6 の 20）の建物である。いわゆる「あんこ」の部分に建物が密集しており、個々の建物の用途を確認できなかったものである。全て専用住宅もしくは店舗併用住宅と考えられる。もうひとつ小規模住居が密集する街区（図 6 の 25）があるが、同様に専用住宅もしくは店舗併用住宅である。それらは不明とするが、全体の分布傾向は把握できる。建築物の構造、用途、階数を示すと図 4 のようになる。

伝統的な住居形式であるバハイ・ナ・バド^{注9)}は存在せず、RC 造がほとんどである（329 棟）。その他に木造 98 棟、木造+コンクリート造 25 棟、石造 12 棟、ブロック造 11 棟などが確認できた。専用住居 144 棟、店舗併用住居 113 棟、商業施設 113 棟、教育施設 43 棟、工場・倉庫・ガレージ 36 棟、政府関連施設 27 棟、公共施

図 4 構造分布（上）、施設分布（中）、階数分布（下）

設 21 棟、宗教施設 16 棟、廃屋 10 棟、建設中 4 棟が確認できた。階数は、大半が 1 階～3 階である（1 階 137 棟、2 階 199 棟、3 階 106 棟）。学校など教育関係施設は 3 階や 4 階であり、8 階建ての高層は、政府関係施設である。

住居はイントラムロスの内部に位置し、政府関連施設や教育施設、宗教施設などは城壁に沿うように分布している。商業施設は、全体に広がっているが、店舗併用住居は中央部に位置している。

歴史的建築物は、教会や市庁舎、学校などいわゆる公共施設に限

られている。総督邸や大司教邸などの建設記録を除いて個人住宅などの建設年はほとんど不明であるが、建設当初から住宅地はイントラムロスの中央部に配置されていたと考えられる。

教会は、20世紀初頭、第2次世界大戦までは、スペイン統治期と変わらず7つの教会（マニラ大聖堂、サン・アウグスティン教会、サン・フランシスコ教会、サン・イグナシオ教会、サント・ドミンゴ会、リコレクトス教会）があった。現在は、マニラ大聖堂とサン・アウグスティン教会のみが残っている。

教会の跡地には、学校が建てられていることが多い。イントラムロスの学校として、スペイン統治期からそのまま存在するものに、サント・トマス大学（戦後にキアボ郊外へ移動）サン・フアン・デ・レトラン大学、サンタ・ロサ大学、マニラ高校がある。戦後の教会跡地に建設された学校に、アプア工科大学（サン・フランシスコ教会跡）、マニラ市立大学（サン・イグナシオ教会跡）、その他教会関連施設（サン・フアン・デ・ディオス San Juan de Dios）の跡地にラシウム大学がある。アメリカ統治期にサント・ドミンゴ教会跡はアメリカ投資銀行に、リコレクトス教会跡は出版社に代わっている。

イントラムロスには、プラサと呼ばれる広場は、ローマ広場（中央広場）とモリオネス広場 Plaza Moriones がある。プラスエラ Plazuela と呼ばれる小規模広場は、San Agustín サン・アウグスティン教会前、サンタ・イザベル Plaza de Santa Isabel、エスパーニャ広場 Plaza España、サント・トマス Plaza Santo Tomás の4か所ある（図5）。

4-2 街路体系

GIS データから交差点における街路幅員を測ると、6.33vara~16.98vara（1vara=0.8359m）であった。アメリカ期に拡張されたアンドレス・ソリアノ・ジュニア Andrés Soriano Jr. Ave 通りが最も広い。マニラの街路幅員は中央広場を中心に広く、広場から延びる8本の道路を中心に測ると、6.33vara~12.56vara となり、平均は東西方向 9.5852vara、南北方向 8.9147vara となる。

イントラムロスは、大きく2種類の街区（中央広場中心街区と南の長方形街区）により構成されている。基本的に南北軸にその違いが見られ、東西軸はそれほど変化がない。

東西軸の規模は、80.25vara~93.3vara であり、平均 89.65vara であった。東西軸街区は 90vara で計画されたと考えられる。

中央広場を中心に都市建設を行うスペイン植民都市においては、広場周辺街区がオリジナルに近いと考えられる。

旧サント・ドミンゴ教会周辺街区（広場の南東）は逆に変化していない。規模は東西南北 90vara×90vara であり、1767年以前の都市図とも一致する。すなわち、この街区がオリジナルであると考えられると、当初の街区は 90vara×90vara で計画されたと言っている。ヴィガンの街区構成も東西南北 90vara×90vara であり、マニラと同じである。

一方、長方形街区の南北の長さは、138.21vara~156.04vara であり平均は、146.93vara となる。戦後に拡張されたレアル Real 通りを

図5 街路体系と街区寸法（単位：vara）と広場

1-Plaza Roma, 2-Plaza Moriones, 3-Plazuela San Agustín, 4-Plaza de Santa Isabel, 5-Plaza España, 6-Plaza Santo Tomás

除いて考えると長方形街区は東西南北 90vara×150vara で計画された可能性が高い。

4-3 街区分割

都市図の中には宅地割を描いた資料がある（AGI,MP-FILIPINAS. 229(1783), 図2-7）。また宅地の形状が分かる俯瞰図としては、ロハスの絵図がある（1715-1720, 図2-2）。建設初期の宅地割を示す都市図はないため、ロハスの絵図を基準として、1783年の都市図、現在の3つの時期を間口、奥行き、面積について比較する^{註10}（図6）。比較可能な街区は33街区である。各街区の宅地数の変遷を一覧表にまとめた（表3）。

ロハスの絵図（図6（上））を見ると、中央広場周辺街区では、縦横2分割する4分割が最も多い。また、分割されていない街区も多く、建設初期の宅地割に近かったと考えられる。長方形街区については様々なパターンがあるが12分割、14分割が多い。基本的には、まず、東西（北西—南東）に2分割され、続いて南北（北東—南西）に宅地分割を行うシステムである。前述のように、広場中心街区は 90vara×90vara、長方形街区は 90vara×150vara で計画されたとなると、その奥行きの規模を 45vara とする分割が基本である。この分割線は、現在も残されている（図6の太線）。

1783年になるとさらに細分化されている。図7に街区の分割パターンを示す。中央広場周辺街区では、角地がさらに2~4分割され、長方形街区も全体的に2~7分割されている。細分割された街区は、特にパリアン門とサンタ・ルシア門を結んだレアル通りに多く、中心街路として商業施設等が立ち並んだと考えられる。広場など人々が集まりやすい通りに面して分割が細かくなっている。1715年-1720年から1783年にかけての宅地分割の変容は、ほとんど変化がない宅地が多いが、変化が見られる宅地のうち角地では35の宅地が、2分割（19）、3分割（11）、4分割（4）、7分割（1）分割され、街区中央では16の宅地が、2分割（15）、3分割（1）、分割されている。特に2分割が多い。

現在の街区構成を見ると（図6（下））、戦争による被害等により以前の宅地割が基準となっているパターンは少なくなる。そして宅地面積も小さくなり、より細分化された宅地割になっている。上述

のように、街区 20、25 は小規模住宅や併設住居が超過密密集している街区で、宅地割を判断できなかった。

人口増加等の理由から細分化が進行するのが一般的であるが、街区番号 21、23、25、30 は 1783 年の段階で分割数が減少している。特に街区 30 は減少が大きいが 1784 年に建設されたパリアンの市場 アルカイセリア・デ・サン・ホセが建設された街区である。

5. まとめ

スペイン植民都市の中で城壁を建設したのは 14 都市しかないが、その中でマニラは 11 番目の都市である。サント・ドミンゴ（イスパニョーラ島、1494 年）^{注 11)}、ハバナ（1515 年）^{注 12)} は、必ずしもグリッド・パターンではないが、整然としたグリッド・パターンの街区割をしている。パナマ（1519 年）、ヴェラクラス（1519 年）のような先行事例はあるが、1573 年のインディアス法（「フェリペⅡ世の勅令」）によって、植民都市計画が体系化される直前の事例である。すなわち、マニラは初期スペイン植民都市の 16 世紀を代表するひとつのモデルと考えることができる。

本稿が明らかにしたことをまとめると以下ようになる。

①イントラムロスの街路体系は、建設初期から、以下を除いて、ほとんど変化がない。街区が大きく変化したのは、スペイン統治時代において、パリアンの市場を建設した際で、サンティアゴ要塞付近の街区については無くなった街区がある。アメリカ統治時代において、パシフ川沿いの城壁が一部取り壊され、その近辺の街区が一部変化している。

②初期の中央広場周辺の街区は、街路の中心間は東西南北 100vara×100vara（芯々）のグリッド、街区は東西南北 90vara×90vara、街路幅員は 10vara で計画された。この基準寸法は、ルソン島の世界遺産都市ヴィガンと同じである。中央広場もイ 100vara×100vara（芯々）で計画されているが、これはインディアス法の規定とは異なっている。

③マニラ・イントラムロスのユニークな点は、もうひとつ、長方形街区が計画されていることである。長方形街区は、東西南北 90vara×150vara で計画されたと考えられる。

④建築物の建設年代から、教会、修道院、市庁舎、病院などの公共の施設は中央広場周辺とイントラムロスの周辺街区に多く建設された。イントラムロスの中央部、南東側の長方形街区には個人の店舗や住居が建設されていたと考えられ、この分布は現在も同じである。

⑤宅地割の奥行きは、各街区を東西（北西—南東）に 2 分割した 45vara が基本である。この奥行きの分割線は現在も宅地割の境界線として残されている。

以上、マニラ・イントラムロスの現在の空間構成は、第二次世界大戦によって大きく破壊されたにもかかわらず、初期スペイン植民都市の空間構成をその骨格において今日に伝えるものと考えることができる。

参考文献

1) Reed Robert R.: Colonial Manila -The Context of Hispanic Urbanism and Process of Morphogenesis-, University of California, 1978
2) Galván Guijo Javier: Arquitectura y Urbanismo de origen español en el

図 6 宅地分割過程 1715-1720（上）、1783（中）、2012（下）
表 3 宅地分割一覧

街区番号	1715-1720	1783	現在	街区番号	1715-1720	1783	現在
1	3	1	①	18	16	18	24
2	1	1	-	19	14	17	17
3	6	8	4	20	12	12	5以上 (一部不明)
4	4	4	4	21	9	8	9
5	1	1	2	22	7	20	2
6	4	4	4	23	14	12	16
7	1	1	1	24	10	12	12
8	2	3	2	25	15	14	16以上 (一部不明)
9	9	16	27	26	12	15	⑨/⑦
10	4	4	3	27	13	23	40
11	4	7	①	28	15	17	22
12	7	7	20	29	12	12	7
13	5	7	7	30	8	4	①/⑮
14	7	14	18	31	6	9	18
15	4	5	5	32	10	12	6
16	6	6	4	33	11	11	1
17	14	20	20				

○：合筆、分筆 「J」：街区分割

図 7 街区の分割パターン (1783)

Pacífico Occidental, Universidad Politécnica de Madrid, 2004

3) Ortiz Armengol Pedro: Intramuros de Manila -De 1571 hasta su destrucción en 1945 -, Ediciones de Cultura Hispánica, Madrid, 1958

4) Gatbonton Esperanza B.: Bastión de San Diego, Intramuros Administration Ministry of Human Settlements, Manila, 1984

5) Z. Torres José Victor: A Walk Through Historic Intramuros, Intramuros Administration and Vibal Pub. House, Manila, 2005

6) Buzeta Manuel: Diccionario Geográfico, Estadístico, Histórico de las Islas Filipinas, Madrid, 1850

7) de Morga Antonio: Sucesos de las Islas Filipinas -1609-, Fondo de Cultura Economica, Mexico, 2007

8) Ang See Teresita: Tsinoi-The Story of the Chaineese in Philippine Life-, Kaisa Para Sa Kaunlaran, Manila, 2005

9) L.E. Bauzo: Deficit Government, Mexico and the Philippine Situado -1606-1804-, Centre for East Asian Cultural Studies, 1981

10) William L. Schurtz: The Manila Galleon, Historical Conservation Society, New York, 1985

11) de Paz Ygunacio: Description of the Philippines island, Mexico Ca, 1658

12) Martínez de Zuñiga Joaquín: Estadismo de las Islas Filipinas o mis Viajes por este País, W. E. Retana, Madrid, 1893

13) Smith, M. T. Paske: The Japanese Trade and Residence in the Philippines, before and during the Spanish Occupation, Asiatic Society of Japan, Tokyo, 1914

14) Lico Gerard: Arkitekturang Filipino, a history of architecture and urbanism in the Philippines, UP Press, Quezon City, 2008

15) 池端雪浦: 日本占領下のフィリピン、岩波書店、1996

16) ニック・ホアキン: 物語マニラの歴史、宮本靖介監訳、明石書店、2005

17) 布野修司: 近代世界システムと植民都市、京都大学学術出版会、2005

18) 岩生成一: 南洋日本町の研究、岩波書店、1966

注

注 1) インディアス古文書館 AGI (Ministerio de Cultura. Archivo general de Indias)資料は、1.・Filipinas (1-273), 2.・Guatemala (1-345), 3.・Santo Domingo (1-916), 4.・Panamá(1-374), 5.・Mexico(1-772), 6.・Buenos Aires(1-304), 7.・Venezuela(1-286), 8.・Perú y Chile(1-270), 9.・Europa y África(1-125), 10.・Florida y Lusiana(1-270), 11.・Otras (81-229), 12.・Pasquines (1-16), 13.・Varios (1-48), 14.・América Generales(1-8), Exp.(3263)からなる 7152 枚である。

陸軍博物館 SHM/SGE の資料は、Tomo1-America en General Carpeta de Cartografia (S.H. 1983), Tomo 3-Mejico Volumen de Cartografia (SHM/SGE, 1990), Tomo 4-America Central Volumen de Cartografia (SHM/SGE, 1990), Tomo 5-Colombia Panama Venezuela Carpeta de Cartografia (SHM/SGE, 1980), Tomo 6-Venezuela Volumen de Cartografia (SHM/SGE, 1990) , Tomo 7-Rio de la Plata Volumen de

Cartografia (SHM/SGE, 1992), Tomo 8-Peru Volumen de Cartografia (SHM/SGE, 1996), Tomo 9- Grandes y Pequeñas Antillas 1 Volumen de Cartografia (GRANDES Y PEQUEÑAS ANTILLAS 1 VOLUMEN DE CARTOGRAFIA, 1999), Tomo 10-Filipinas Volumen de Cartografia (SHM/SGE, 1996), Carpeta 2-Estados Union y Canada Láminas (SHM/SGE, 1989)である。

注 2) J.R. ヒメネス・ベルデホ, 布野修司「セブ市 (フィリピン) の都市形成とその都市核の空間構成に関する考察」(『日本建築学会計画系論文集』553,pp.1867-1874,2011)

注 3) 脇田祥尚ほか「フィリピンにおけるスペイン統治期の都市計画:その 2 ヴィガンの都市空間構成」(『学術講演梗概集』F-1,pp.917-918,1998), 脇田祥尚ほか「フィリピンにおけるスペイン統治期の都市計画:その 3 ヴィガンの都市構成」(『学術講演梗概集』F-1,pp.281-282,1999), 柳沢究ほか「フィリピンにおけるスペイン統治期の都市計画:その 4 ヴィガンの街区構成」(『学術講演梗概集』F-1,pp.283-284,1999), 山口潔子ほか「ヴィガン (イロコス, フィリピン) の街区構成に関する考察」(『日本建築学会計画系論文集』553,pp.209-215,2002), 山口潔子ほか「ヴィガン (イロコス,フィリピン) における住宅の空間構成と街区分割」(『日本建築学会計画系論文集』572,pp.1-7,2003), 飯田敏史「フィリピン・ヴィガンの都市空間構成とその変容に関する考察」(修士論文,滋賀県立大学大学院,2011 年 3 月)。

注 4) 1846 年 9 月 4 日・1912 年 6 月 1 日, アメリカ人建築家であり, 都市計画プランナー。シカゴで行われた世界博覧会のディレクターを務め, シカゴとワシントンの都市計画, フラットアイアンビルやニューヨークのユニオン駅を設計している。

注 5) J.R ヒメネス・ベルデホ, 布野修司, 齋木崇人「スペイン植民都市図に見る都市モデル類型に関する考察」(『日本建築学会計画系論文集』616, 92-97, 2007)

注 6) イントラムロスも周辺の町も街区は描かれず, 簡略化されて描かれた都市図 5 枚を除く。

注 7) マイニラッド Maynilad とする文献もある。

注 8) マニラ・パリアンの創設は 1582 年である。パリアンの語源は, メキシコ語説, イロコス語説, 中国語説があるが定かではない。メキシコでは, 東洋の産物の市場をパリアンと呼ぶ。もともとスペイン語のアルカイセリア, すなわち生糸市場をパリアンといい, 中国産の生糸の市場を意味していたと考えられる。中国語ではパリアンに「潤」あるいは「潤内」という漢字をあてているが発音は異なる。マニラにおいては, 中国人居住地とするが, 実際, マニラの場合は生糸工場すなわちパリアンとすると創設当初の記録に残されている。マニラなどの都市に舶載する商品の中で最も重要なのは中国人の生糸であった。しかしながらパリアンの建設には, 多くの事情を抱えている。『モルガ フィリピン諸島誌 大航海時代叢書Ⅶ』(【監】神吉敬三, 箭内健二 【発行】岩波書店 1966 年第 1 次, 1978 年第 2 次発行) によれば, エスパニーヤ人とシナ人の関係の悪化, 課税の問題などの不正が相次ぎ, 離れて住むように命じ, そこにシナ人のために店舗などが建設されたが, そこで売られる商品には高価で売られた。つまり中国人隔離居住地の創設すなわちパリアンである。

注 9) バハイ・ナ・バト bahay na bato (タガログ語で「石 bato の家 bahay」)とは, フィリピン都市で 19 世紀後半から 20 世紀初めに多く建てられた, 都市富裕層の住宅である。木骨石・煉瓦造の一階部 (あるいは構造的には木造であるがカーテン・ウォールとして石・煉瓦が用いられた一階部) と木造の二階部で構成された二階居住型の住宅で, 格子状の引き戸に加工されたカピス Capaz 貝がはめ込まれた窓が外観の特徴である。しかしながら「バハイ・ナ・バト」というタガログ語の呼称が文面に現れ始めるのは 1880 年代に至ってからであり, これはアメリカ占領期に, スペイン時代の建築と区別するために用いられ始めたと考えられている。つまり, これ以前は名前や明確な時間区分を持った特定の住宅様式として認識されていなかった。その為に「バハイ・ナ・バト」の発生時を正確に決めるのは困難である。

注 10) 教会がある街区, または台形街区は, 間口, 奥行きに一定の基準がないため除く。街区分割を描いた図 2-7 から読み取れる街区分割を現在の GIS データに落とし込み, これをもとにロハスの描いた街区分割を割り出した。

注 11) J.R. ヒメネス・ベルデホ, 布野修司「サント・ドミンゴ (ドミニカ共和国) の都市形成と空間構成に関する考察」(『日本建築学会計画系論文集』648, pp. 385-393, 2010)

注 12) J.R. ヒメネス・ベルデホ, 布野修司, 若松堅太郎「ハバナ旧市街の都市形成と街路体系に関する考察」(『日本建築学会計画系論文集』675, 2012)

(2012 年 3 月 12 日原稿受理, 2012 年 8 月 10 日採用決定)